

## 記念講演

## 私の読書と子どもの読書

講師：長谷川 摂子（絵本作家）



今日のテーマは「私の読書と子どもの読書」ということですが、「私の読書」から「子どもたちとの読書」を語ることによって「子どもの読書」というものにつなげていければと思います。

私はとても小さいときから本が好きでした。最初に抱えていた本は『サザエさん』だったそうです。当時の私にとって『サザエさん』は謎に満ちた本でした。小学生のとき夢中だったのはバーネットの『小公子』『小公女』です。特に『小公子』が好きで、今でも職場から夕方ぼつりと灯る家の灯りを見ると『小公子』の主人公セドリックが別宅に住むお母さんの家の灯りに「おやすみなさい」と言ったシーンを思い出し、「セドリックのお母さんの家だ」と思ったりしています。また、ジョルジュ・サンドの『愛の妖精』も愛読し、頑な双子の兄の心をヒロインが解きほぐしていくところに「女性の力」というものを感じました。それから小学校高学年になって宮沢賢治の『風の又三郎』を読んだのですが、当時はまったくおもしろいと感じませんでした。子どものときはストーリー重視でしたので、

文章の美しさを味わうということができなかったのでしょう。

当時の学校図書館はたいへん貧弱で、私は貸本屋をよく利用しました。1日4円でしたので、なんとしてもその日のうちに返すために、学校の休み時間にもせっせと本を読んだものです。おかげで「つまらないところは飛ばす」という読み方が身に付きました。おもしろいところだけ読む、わからないことも何回か繰り返すうちに分かってくる——これは後に大学で洋書を読むようになってからたいへん役立ちました。また自宅の蔵には吉川英治・山岡壮八、夏目漱石、その他大衆小説もあり、家にあるものは何でも読みました。

私が子ども時代の読書で学んだのは「本を読むということは楽しみ以外の何ものでもない」ということでした。今でも心を揺さぶられるかどうか、私の読書では一番の問題です。

さて中学3年生頃から私の読書は「修行の時代」「訓練の時代」が始まりました。いわゆるちゃんとした名作を読もうと決めたのです。ですが、いきなり大人向けの名作が楽しめるはずがありません。この頃は「おもしろくなくても読み通す」という状態でしたが、読書力の筋肉がついたと思います。そんな中でもおもしろいと感じたものはあり、漱石の『それから』、太宰の『津軽』、ミッチェルの『風と共に去りぬ』などが印象に残っています。

大学に入学してからは外国語で本を読むということを始めました。このとき役に立ったのが子どもの時に習得した「おもしろいところだけ拾い読む」という技術です。分からない単語やフレーズがあっても読み進むことができました。またデカルトやモンテーニュなどの思想書も読みました。

26歳のときに大学院を辞めて保育士になりました。アカデミズムの世界と自分は合わないと考え、生きた人間と触れ合う職業として保育士になろうと決めたのです。当時は第

2次ベビーブームですぐに資格を取得して就職できました。しかし大学時代に保育を学んだわけでもない素人でしたので、最初は全くやり方が分かりません。困った私は「本が好きだったから、絵本を読むことならできる」と思いつきました。実践してみたところ、子どもたちは熱心に聞き入ってくれ、「子どもと心をひとつにする」時間を持つことができました。おかげで保育士としてなんとかやっていけそうだと思うことができたのです。読み聞かせだけでなく、素話もやりました。素話もやれそうだと思ったのは、子ども時代に弟を寝かしつけるときに作り話をしてやったらたいへんうけたという経験があったからです。私自身は昔話などを聞かせてもらった経験がなかったので、ひたすら本を読んで話を覚え、忘れないうちに子どもたちに話しました。1・2歳児担当のときは絵本より素話が喜ばれました。

さて読書というのは基本的に孤独な作業です。本と私、1対1の世界で思考を鍛えていくものです。それは孤独ながらたいへん豊かな営みです。高校・大学時代になりますと友人たちと感動を語り合う（共有する）ということができるようになります。それは「人と何かを分かち合いたい」という人間のコミュニケーションの根っこの部分に基づくものなのでしょう。ところが感動を誤解なく他人に伝えるということはなかなか難しいものです。ですが、保育士として保育園で働いているとき、私は子どもたちと一緒に絵本を読むことにより、読書の感動を共有することができたのです。お話がおもしろいと子どもたちは動かなくなり、集中してくるのが分かります。私と子どもたちの間の空気がゼリーのように固まってくるのです。そして子どもたちは本の感動を素直に表現してくれます。こんなふうに他人とつながれる時間は、宝物のようだと思います。

ところでこの「ゼリーが固まる」状態にい

ったい何が起きているのでしょうか。その答えがル＝グウィンの『ファンタジーと言葉』（岩波書店 2006 原題The Wave in the Mind)の「語ることは耳傾けること」という章にあります。「すべての生物は振動している。わたしたちは震えているのだ。」(p200)で始まる部分がそれです。小さな子どもはリズムのある言葉（詩や言葉遊び）が好きですが、リズムとはつまり振動、生きていることに通じます。自分の振動だけではありません。他人の振動もそこには含まれます。自分と他人のリズムが合えば関係が上手くいく、リズムを合わせる必要があるのです。さきほどの私の保育園での読み聞かせに話を戻しますと、「ゼリーが固まる」というのはこの子どもたちと私の振動が合って共振している状態（ル＝グウィンは「同調化」と呼んでいます）だと思います。その共振を支えているのが言葉・声——言葉はリズムとなって伝わり、相手のリズムに同調するのです。

就学前の子どもにとって言葉は音楽です。リズムを持って染みこんでくるもので、その流れを楽しんでいるのです。子どもが繰り返す「(同じ本を)読んで」と言うのはこのためです。我々大人も気に入った音楽は何度も聞きます。それと同じです。リズムを体に刻み込もうとしているのです。そして成長するに従って概念的なとらえ方をするようになり、「ひとつのもの(本)を繰り返し楽しむ」という時間は短くなっていきます。



最後にまとめになりますが、二つお話しさせていただきます。まず、読み聞かせは自分のリズムで入っていくことが大切です。そうすれば自然に物語に入ってゆけ、子どもたちにもそれが伝わります。～しなければいけない、という指導やマニュアルはよくないと思います。

またなぜ読むのかという基本的なことについてですが、私は本そのものの楽しみのためだと思います。そのためには子どもと本を共有することが大人にとっても大事なのだと思っています。

〈質疑〉

Q 『きょだいなきょだいな』（福音館書店1988刊ほか）のトイレットパーパーの発想はどこから着想されたのでしょうか。

A 子どもと散歩していたら、道ばたの大きなローラーを見て泣き出してしまったので、これは怖いのだろうと思ったことからです。でも、トイレットパーパーなら日常的なものなので、怖くなりすぎなくてよいだろうと考えました。